

2017 年度アメリカフィンドレー大学春季研修
ベーシックアニマルハンドリングプログラム 活動報告書

獣医学群獣医学類 3 年 天野真衣

【目次】

- ①はじめに
- ②活動報告
 - 1) 平日のスケジュール
 - 2) 馬学科の実習 (平日 7 時～10 時)
 - 3) アニマルサイエンスの実習 (平日 12 時 30 分～15 時)
 - 4) 放課後の活動 (平日 17 時頃～)
 - 5) 週末
- ③英語とアメリカ文化について
- ④まとめ
- ⑤次年度以降の参加者に向けて



フィンドレー大学のシンボルの前で

【①はじめに】

私は 2018 年 3 月 10 日から 3 月 30 日の 3 週間、アメリカ合衆国オハイオ州にあるフィンドレー大学にて、ベーシック・アニマルハンドリングプログラムに参加しました。この報告書がお世話になった多くの方々に今回の研修の成果をお知らせすると共に、次年度以降この研修に参加する学生の助けになればと思います。

【②活動報告】

1) 平日のスケジュール

研修期間中、平日は午前には馬学科の実習を 3 時間、午後に生産動物に関するアニマルサイエンスの実習を 2 時間行いました。放課後の活動は日によって異なり、動物関連機関を訪れたり、猫の避妊・去勢手術や馬の採血の現場に参加したりしました。詳しいスケジュールは下記の表をご覧ください。

5 時 30 分頃	起床、朝食、移動
7 時～10 時	馬学科の実習
10 時 30 分頃	昼食、移動
12 時 30 分～15 時	アニマルサイエンスの実習
17 時頃～	午後の活動、夕食など
23 時頃	就寝 (金曜日を除く)



3 週間生活した宿泊施設

2) 馬学科の実習 (平日 7 時～10 時)

馬術には「イングリッシュ」と「ウエスタン」と呼ばれる 2 種類の乗馬法があり、フィンドレー大学はそれぞれに専用の厩舎と馬場を所有しています。私たちは平日の午前 7 時から 10 時まで、ウエスタン乗馬の施設「ウエスタンファーム」に通い、馬学科 2 年生の実習に参加しました。この時間は、毎日異なる学生とペアを組み、給餌、掃除、乗馬の準備 (毛と蹄の手入れや馬具の設置など)

を一緒に行います。

ここでは何もかもが驚きの連続でした。まず驚いたのは施設と飼育体制です。ウエスタンファームには巨大な厩舎に加え、病気の馬や外部から移動してきた馬を一時的に隔離する厩舎、3つの室内馬場、それに広大な屋外馬場が備わっています。300頭以上の馬が常時飼育されており、日本で見たことのない色や品種のものが多くいました。これだけ沢山の馬が飼育されているにも関わらず、それぞれの馬に適した牧草の種類と量、ビタミンやミネラルが配合されたペレットの種類と量、咳の出る馬には牧草を濡らすことなど、きめ細かい給餌方法が記載されており、学生は慣れた手つきで作業していました。また、それぞれの馬の体調や投薬歴が細かく記録され、それに基づいて適切に管理されていました。

次に驚いたのは実習内容です。馬学科2年生30名は、外部の馬主から各々1、2頭の馬を預かり、世話、体調管理、調教などを全て自分で行います。そして、どの学生も馬の性格や健康状態をよく把握し、状況に応じて沢山の馬具や医療品を使い分けていました。責任のかかる実践的な実習を毎日行うことが、学生が大学卒業後に現場で「経験をもとに考えて動ける人材」となる大きなカギになると強く感じました。

他にも、削蹄や妊娠馬のエコー検査の様子、歯の手入れの様子、馬の去勢の様子を見学したり、サプリメントの経口投与を経験したりしました。実際に乗馬する機会も頂きました。馬と何の縁もなかった私が、毎日馬と触れ合い、世話や治療の仕方を学び、何より馬が大好きになるなんて想像もしていませんでした。とても貴重な経験をしたと感じています。



馬の歯を整えているところ



乗馬を体験しているところ



去勢するために馬を押し倒しているところ

3) アニマルサイエンスの実習 (平日 12時30分～15時)

平日の午後は、アニマルサイエンスの授業を2コマ受講しました。12時30分から13時30分の1コマ目は馬に関する実習で、14時から15時の2コマ目は生産動物に関する実習です。馬に関する実習では、ウエスタンファームの一角で実際に馬を用いて基本的な馬の治療法を学びました。2コマ目はあらゆる生産動物が飼育されているアニマルサイエンスビルディングで、生産動物の飼養管理法を学びました。具体的に行った内容は下記の表をご覧ください。実際に動物にメスを入れるのは私にとって初めての経験だったので緊張しましたが、それ以上に新鮮で楽しいものでした。

馬	採血、筋肉注射、バンデージの巻き方
豚	去勢、断尾、断歯、耳パンチ法による個体識別、筋肉注射
山羊	去勢、除角、爪の手入れ
牛	去勢、除角

そして、この実習で最も衝撃的だったのは TA (ティーチングアシスタント) の方々です。この実習を担当するカーズ教授の元には 9 人の TA と呼ばれる学生がついており、毎日実習の手伝いをしています。私たちは彼らの指示のもとに実習を行うのですが、彼らは工程を完璧に遂行し、外国人の私たちにも分かるようかみ砕いて説明してくれました。よく勉強し、動物と触れ合い、長い時間をかけて何度も練習していなければできない事です。その機会を掴み取り、自信をもって行動する彼らに感動しました。



馬にバンテージを巻いているところ



羊を捕まえる練習をしているところ



豚の去勢をしているところ

4)放課後の活動 (17 時頃～)

放課後の活動は日によって異なりました。その中で最も印象に残ったのは、何と云っても「フライデーナイト」です。これは毎週金曜日に、カーズ教授と TA の方々の指導の元、手術の現場に参加するものです。とはいえ、すぐに手術を行うわけではなく、まずはピザやクッキーで腹ごしらえをします。その後、19 時頃から野良猫や学生の飼い猫の避妊・去勢手術を開始します。全 10 匹ほどの猫の手術を終えると、アニマルサイエンスビルディングに移動し、患畜の処置を行います。今回は、放線菌症の山羊の治療、豚の腹に溜まった膿の除去、脚の弱い子山羊の処置、アンモニアが溜まって急死した子牛の解剖などを行いました。また、馬伝染性貧血の検査のための馬の全頭採血も行いました。何もかもが初めて見る事、初めてやることで、とても楽しかったです。また個人的には、アメリカでの麻酔薬の使われ方が日本とかなり違った点が興味深かったです。

他にも、ホースセラピーのボランティア参加、ペットホスピスに関する講義、保健所の見学、ドッグブリーダー見学、乳牛の農場見学など、学びのある放課後を過ごすことができました。また、この交換留学プログラムで日本に来た学生や今年日本を訪れる学生と何度も交流することができました。全てについて書くことはできませんが、私にとってどれも新しく、あらゆることを考えさせられる時間になりました。



左：カーズ先生、TA の方々との集合写真

右：猫の去勢の準備をしているところ

5)週末

滞在中、休日は2度あり、1度目の週末はトレド動物園とホースレスキューセンターに行きました。そして2度目の週末はホームステイをしました。ホームステイではデイトンという街を訪れました。ショッピングモール、牧場、クラシックコンサート、教会、美術館、公園など、あらゆる場所を案内してもらい、非常に楽しかったです。このプログラムではほとんど大学の外に出る時間がないので、ホームステイはアメリカの暮らしや文化を知る良い機会になります。ぜひ、来年以降もホームステイがプログラムに組み込まれてほしいと思います。



左：ホームステイ中に訪れた教会

右：クラシックコンサートを聴いたシダービル大学

下：ホースレスキューセンターで馬を散歩させているところ

【③英語とアメリカ文化について】

私にとって、この研修での大きなテーマはもちろん動物を学ぶことでしたが、英語とアメリカについて学ぶことも大きな目標でした。

英語に関しては、自分なりの勉強方法を確立することができたことが大きな収穫と言えます。英語を話す機会など皆無の日本で、英語、特にリスニングとスピーキングを会得するのは難しいことです。実際、私も高校生の時は「日本で生きていくのだから英語なんて必要ない。とりあえず大学受験で使えるリーディングだけ勉強しよう」と思っていました。しかし、この3週間をアメリカで過ごしてみて、もっと英語を聞いて話せるようになりたいと強く思いました。私なりの英語の勉強法は、何かしらの英文を毎日書くことです。日頃から英文を作ることに慣れていないと、会話の中でとっさに脳内で英文を組み立てて喋ることは不可能だということに気づいたからです。また、この方法ならリスニングに必要な語彙力を増やすこともできます。そのような訳で、この報告書を英語に書き直してみました。人前に公開できる実力でないことは承知の上です。これが今の自分の実力だと受け止め、自分なりに精進したいと思います。

また、今回の研修でアメリカについてもより深く知ることができたと思います。特に印象に残ったのは、ボランティア文化です。私たちが訪れたほとんどの動物関連機関には多くのボランティアがおり、みな精力的に活動していました。自分の専攻である動物について学びながら人の役に立つことができるボランティア文化が発達しているのは素晴らしいことだと思います。アメリカでボランティアが発展した背景には宗教的・歴史的背景があるように思いますが、日本でももっと発展してほしいと思いました。また、アメリカの動物愛護の先進ぶりにも目を見張るものがありました。動物園はそれぞれの動物に広大なスペースが確保されており、ストレスが軽減されているようでした。アメリカでは動物園が少しでもアニマルウェルフェアに反した行いをすると社会的に批判されるそうです。また、ペットショップでは犬や猫は売られておらず、代わりに犬のしつけ教室が行われていました。アメリカでは犬や猫は、直接ブリーダーから買うか、保健所から無料で引き取るのが一般的な様です。日本で動物愛護の心を広めるのは絶望的ではありますが、少しでも現状を好転させる術を模索したいと思います。



左：ホースセラピー施設のボランティアの名札。何十人もボランティアがいる。

右：トレド動物園の展示スペースの一つ。広大すぎてどこに動物がいるのか分からない。

【④まとめ】

人生で最も動物に触れ、多くのことを学んだ刺激的な3週間でした。体力的に限界を攻めていくようなスケジュールでしたし、アクシデントも多々ありましたが、無事乗り越えられて良かったと思います。研修中に強く感じたのは、実学の大切さです。フィンドレー大学の学生は毎日のように動物を扱い、実際に手を動かして多くのことを学んでいます。私も誰かからそのような機会を与えられるのを待つのではなく、自分から行動しなくてはいけないと思いました。これからは日々の授業や実習を大切にだけでなく、大学外の実習にももっと積極的に参加しようと思います。また、この研修中に素晴らしい方々に沢山出会ったことで、オハイオ州は私にとって思い出のある場所になりました。この気持ちをこれで終わらせず、彼らと連絡を取り合うとともに、また再びオハイオ州を訪れたいと思います。

【⑤次年度以降の参加者に向けて】

最後に、次年度以降の参加を希望する方の参考になりそうなことを書こうと思います。日本とオハイオ州の時差は13時間と昼夜逆転した状態なので、初めの数日間は苦労します。不安な方はアイマスクや睡眠薬を持っていくと良いでしょう。気温は氷点下になる日も多く、私は毎日凍えながら生活していました。身体を暖めるダウンコートやヒートテックは必要不可欠です。毎日の実習中では、動物の毛や糞尿で汚れたり臭いがついたりします。服装は動きやすくかつ汚れても良いトレーナー、ジーンズ、スウェット、スニーカーを用意しましょう。宿泊施設の周りにはコンビニやスーパー

一がなく、週に1度ほどしか買い物に行くことができません。洗面用具やシャンプー、歯磨き粉、常備薬などは3週間分を持参することをお勧めします。食器、洗濯用洗剤、ドライヤー、バスタオル1枚、フェイスタイル1枚は支給されるので持参しなくても問題ないです。所持金は現金で200ドル程度、クレジットカードに学費と数百ドルほどあれば十分だと思います。食費や移動費が学費に含まれていること、毎日忙しく大学外に遊びに行く時間が少ないことから、現地ではあまりお金を使いません。食事はどれも本当に美味しく、また学食はバイキング形式なので私の様に食べ過ぎてお腹を壊す怖れがあります。胃薬を持参すると良いでしょう。日本からのお土産はできるだけ沢山持参すると良いです。このプログラムに参加する前には想像もできなかったほど多くの方々にお世話になります。私はレターセットや折り紙を持って行けばもっと感謝の気持ちを伝えられたのに、と後悔しました。

そして参加するか否か迷っている方へ。お金の問題さえクリアできるなら絶対に参加するべきです。間違いなく、あなたの人間性と人生観に大きな影響を与える3週間になります。思い立った時に行くべき時です。一人でも多くの方がこの研修に参加し、多くの学びを得ることを願ってやみません。



交換留学に関わった全ての学生とベケット会長、フォーシー教授、川村先生との集合写真。



ホームステイを受け入れてくれたジョニーと兄のプライス。